IGFA RULE SECTION

IGFAルール変更の歴史 釣りの変化を映す鏡

IGFA(インターナショナル・ゲームフィッシュ協会)が、第二次世界大戦勃発の1939年に創立されたというのは奇遇だと思います。各国が外交と紛争の泥沼に引きずり込まれようとする時、レクリエーションとしての釣りのルールを定め、倫理基準を作り、その理念を世界に広め、これまで存在しなかったゲームフィッシュの記録データベースを構築しようという目標を掲げて生まれた組織です。

学問とレクリエーションという2つの世界に貢献することを目指すIGFAの基本姿勢は今も変わりませんが、思考の柔軟性はすでに創立10年後に証明された形になっています。かつて麻の編み糸であったビッグゲーム用ラインは、何本を撚り合わせたか(スレッドカウント)によってカテゴリー分けされていましたが、ナイロンをはじめとする化学繊維の登場により、1949年にラインの破断強度に基づく分類が採用されたのです。この合理的なルール変更は、戦後の釣りブームも相まって、記録申請の数を大きく伸ばしました。

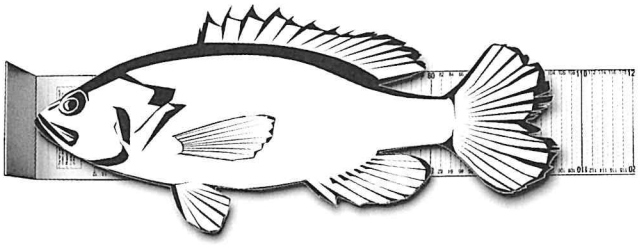
時代がさらに下って1978年に、会長のエルウッド・K・ハリーは「フィールド&ストリーム」という雑誌が1910年から維持してきた淡水魚の世界記録、「インターナショナル・スピンフィッシング・アソシエーション」が管理してきた淡水魚の世界記録、さらには「ソルトウォーター・フライロッダーズ・オブ・アメリカ」による海のフライフィッシング記録管理をすべて引き受けるという大英断を下します。異なるカテゴリーの釣りを現場の形に沿って収容するためにルールは大きく改正されましたが、これにより会員数および記録申請数は大きく伸び、組織も成長を見せました。

このように、IGFAは最新の釣りの状況をつねに注視しています。相手である魚たちに対して、および仲間の釣り人に対してフェアなメソッドとタックルを使うことが、IGFAルールの根幹です。使用している仕掛けは口以外の部分への引っかけを誘発しないか、魚のファイト能力を不当に阻害しないか、アングラーが魚に対して不当といえる補助を得ていないか、魚へのダメージはどうかなどが厳密に検討されます。この記事では、ここ10年ほどでIGFAが採用してきたルール変更をご紹介してみたいと思います。それにより、この団体の「釣り」に対する姿勢も、違った方向から浮き彫りになるのではないでしょうか。詳細は、ルール全文が掲載されている「JGFAイヤーブック2020年版」をご覧ください。

(1)オールタックル・レングス・レコードがスタート 2011年1月

キャッチ&リリースを前提とした長さの世界記録部門。資源保全のムードが高まりつつある今日、「釣った魚を記録申請したいが、リリースして資源保全に貢献したい」というアングラーの要望を形にしたものです。重量を計測しても差し支えありませんが、他の重さのカテゴリーには同時申請できません。ルールはIGFAルールが適用されますが、その他、以下の規則があります。

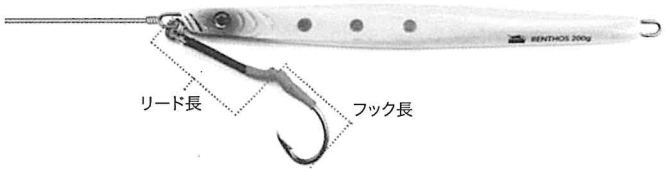
・IGFAの販売する専用メジャーを使ってください。
・魚が死んだ場合は申請できません。
・口吻の先端からメートル法で叉長を測ります
(ただし叉長の計れない魚は全長)。ミリ単位は切り捨て。
・既存記録を少なくとも2cm超えないと新記録としては認定されません。
・ギャフの使用は禁止。ネットは最長フィート(2.44m)まで。
ラバーネットを推奨。
・申請できる対象魚とその最小サイズが決められています。
海水魚67種、淡水魚60種。



(2)IGFAがアシストフックの正式ルールを発表 2011年2月

メタルジグなどに使用するアシストフックについては、IGFAにさまざまなパターンを図示してルールに適合するか確認した上で公表してまいりましたが、日本だけではなく諸外国からも問合せがあり、IGFAも個別のルール確認に回答することは混乱を招くという考えから、正式に「アシストフックに関するIGFAルール」が発表され、モノフィラメント、マルチフィラメント、ワイヤなどの「リード」を介してルアーに接続される、いわゆるアシストフックの類のシングルフックに関しては、以下の規定を遵守することとされました。

●スカートなしのルアーにアシストフックを使用する場合、リードの長さは使用するフック長の1.5倍を超えてはならない。またフックのベンド位置は、ルアーと接続される最近点から4インチ (101 mm) を超えてはならない。アシストフックとして、ダブルフックやトレブルフックを使うことはできない。また、アシストフックはシングルフックとし、2本のシングルフックをタンデムにして使うことはできない。プラグの場合と同様、1つのルアーに対して最大3本のフックを使うことができる。



(3)リリースに関する新ルールを発表 2012年1月

この新しいルールは、ファイトからランディングに至るどの段階からリリースとなるかを定義すると同時に、アングラーにリリースを推奨するもの

で、以下のルールが承認されました。

●IGFAは、以下のいずれかが起こった場合、正式にその魚をリリースしたと判断します。

A.同乗しているメイトがリーダーを握った。

B.スイベルがロッドティップに到達した。

C.リーダーとメインライン/ダブルライン/フライラインの間のコネクション(ノットやスプライスなど)がロッドティップを通過した。

また、魚にとってやさしいリリースにつながる推奨事項を下記のように定めました。

○ライブベイトやデッドベイトを使う場合は、サークルフックの使用を推奨。

○フックを安全に、魚にダメージなく外せる場合は、外してリリース。

○もしフックが外せない場合は、近い位置でリーダーを切りましょう。

○リーダーを握って意図的にそれを強く引き、切るのはやめましょう。あご以外の場所にフックがかかっている場合、魚に大きなダメージが起こります。

○疲れた魚を回復させるためには、ゆっくりとエラに水を通してやります。

○ネットを使う場合には、結び目のないラバーコーティングされたものを。

(4)フライフィッシングのリーダーサンプル提出条件を変更 2012年4月

IGFAはこれまで、フライ記録の申請にあたっては、フライ+ティペット+リーダーに加えて、フライラインの先端部1インチを提出することを要求していました。しかし、リーダーとフライラインをループ接続する人が増えてきましたので、それを受けてルールを変更し、フライラインの先端部は条件から外すことにしました。もしフライラインとリーダーバットの間にループ接続を行っている場合は、たんにループを外して提出すれば良いことになります。ただしリーダー全体は、フライを含めて、魚を釣り上げたときのままの完全な形を保っていなければなりません。

(5)IGFAルール「セーフティー・ラインに関するルール変更」 2014年3月

IGFAは2014年1月のトラスティ会議で、セーフティー・ライン(尻手ロープ)をリールやハーネスにも取り付けられるように変更しました。これはアングラーの安全向上を視野に入れたものです。ただしセーフティー・ラインにかかるテンションにより、結果として魚とのファイトが楽になる、もしくは力を抜いて休憩が可能になるようなものは許可されません。変更前のルールは、「落下防止のための尻手(シッテ)ロープは、魚とファイトしている時、釣り人に有利に作用しないものに限りロッドに取り付けてもよい。」となっていましたが、変更後は以下のとおりです。

●落下防止のための尻手(シッテ)ロープは、魚とファイトしている時、釣り人に有利に作用しないものに限りロッド、リール、あるいはハーネスに取り付けてもよい。

(6)IGFAルールの大幅改訂(特に申請最低重量の変更) 2017年4月

ーアングラー以外の人の干渉について

現行の『海と淡水のフィッシング・ルール』において、『失格となる行為』第2項には「魚がヒットしてからファイト中、そして取り込みないしリリースが完了するまで、釣り人でない人が、ロッド、リール、およびライン(ダブルラインも含む)に直接または間接的に触れることはできない。」とありますが、第三者がアングラーに触れることの是非に関しては言及がありませんでしたので、『失格となる行為』第15項を新設しました。

●魚とのファイトを助ける、あるいはかかった力を逃がすようなやり方でアングラーを支えたり、触ったりしてはならない。ただし、転倒を避けるために短時間だけ触る、支えるなどの行為は許される。

ーバッキング(下巻き糸)とメインラインについて

現行の『海と淡水のフィッシング・ルール』において、『釣具の規定』においてラインとライン・バッキングは項目が別れており、こう定められています。「フィッシングラインとバッキングが結ばれている場合は、いずれか強い方のラインクラスに組み入れる。」

この条文は、長い間論争の的となってきました。論理的に考えれば、メインラインがバッキングよりも細い場合、当然そちらのほうが先に切れてしまうからです。また最低15インチ(38.10cm)使用するティペットの強度でラインクラスを決めるフライフィッシングのルールとも方向性が異なっています。そこで、IGFAは『釣具の規定』A に変更を加えました。

・タイトルを「ライン」から「ラインおよびバッキング」に変更します。

・第3項「バッキングの使用は許可される」を追加します。

・第4項「使用するラインのクラスは、ダブルライン、リーダーないしフックに接続された先端部分5メートルの破断強度で決定される。このセクションは同一素材のシングルラインであること。(JGFA 事務局からの注釈:シングルラインにはダクロンやPEラインなどの編糸も含みます。)」

ー世界記録の対象魚について

世界中にゲームフィッシュは存在しますが、これまで認定魚種を拡大しすぎたきらいがあるため、ラインクラス部門の淡水・海水あわせ45種類をリストから落とすことにしました。残念ながら、日本に生息するイシダイやイシガキダイもラインクラス対象魚から外されました(オールタックル部門では、もちろん申請対象です)。

ー申請魚の重量について

これまで、ラインクラスないしティペットクラスの世界記録申請における最低重量は1ポンド (453g) とされており、結果として小型魚の記録が多くなってきました。傑出したキャッチを顕彰するというIGFA世界記録の理念に基づき、新しく申請する魚の重量は以下のとおりとします。

・10kg(20ポンド)以下のラインクラス、ティペットクラスの場合:魚の重量は、少なくともライン強度の半分があること。たとえば 6kgクラスに申請する魚は、少なくとも 3kgの重量が求められます。

・10kg(20ポンド)を超えるラインクラスの場合:魚の重量は、少なくともライン強度と同じであること。たとえば 24kgクラスに申請する魚は、少なくとも 24kgの重量が求められます。

新しく採用される最低重量規則は遡及(さかのぼって)適用されません。すなわち、上記の最低重量規則に達していない場合でも、既存の記録は無効となりません。

(7)申請最低重量の再変更 2019年5月

IGFAは、(6)にあるように10kgを境に、それ以下のラインクラス、ティペットクラスの場合の申請魚の重量は、少なくともライン強度の半分があること、10kg（20ポンド)を超えるラインクラスの場合の申請魚の重量は、少なくともライン強度と同じであること。と2段階にわたり、申請最低重量を設けていました。しかし2019年にはさらなるシンプル化を目指し、再変更を行いました。最新のルールではこうなっています。

●すべてのラインクラスおよびティペットクラスに関し、申請魚の最低重量は、ライン強度の半分とする。計算はポンド表記に基づいて行うので、たとえば6kg（12ポンド）ラインクラスに申請するためには少なくとも実測6ポンド、すなわち2.72kgの重量が求められます。

(8)フライのドロッパー仕掛けに関するルール改正 2020年5月

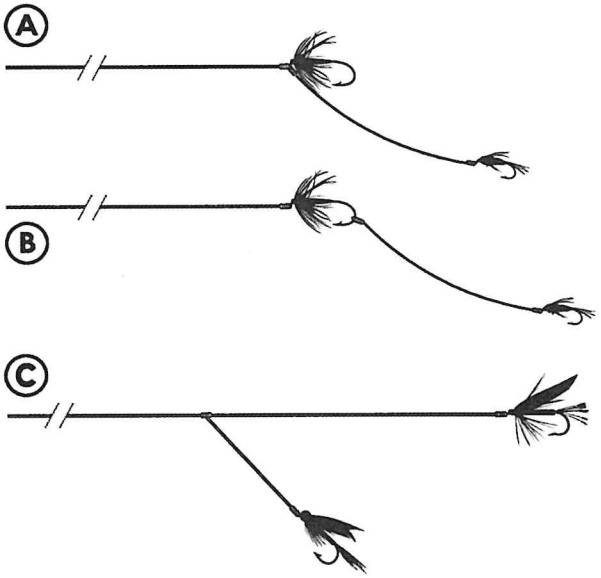
ドロッパーとは一般にフライの枝バリ仕掛けと定義され、昔から活用されてきましたが、現在はとくに「ドライ&ドロッパー」というタイプは世界各地で広く使われています。IGFAのフライフィッシング関連ルールは枝バリの使用を禁止していましたが、それはもともと、海のアングラーであったレフティー・クレーたちの考える方向性に従って作成されたものだからです。IGFAは、淡水のフライフィッシング・コミュニティからの要請に基づき、またIGFAのフライフィッシング・ルールが備える理念に立脚し、ドロッパーフライの使用を制限付きで認可する条文を追加しました（訳文は暫定的なものです)。

●ドロッパーフライは、以下の仕様を採用する場合にのみ、サケ科の魚（マス、グレイリング、サケ各種）に限定して許可されます。

1.ドロッパーフライは、浮かべて使うフライ、沈めて使うフライ、ないしそれらの組み合わせとしてタンデムで使うものとし、リードフライとの合計で2本が許されます。

2.ドロッパーフライに接続されたティペット部の強度は、リードフライが接続されたティペット部の強度と同じか、それ以下であること。

3.釣り上げた魚のカテゴリーは、リードフライが結ばれたティペットの強度によって決まり、魚が実際にどのフライに掛かったかは不問とします。



IGFA ルール変更の歴史（2011 年以降）

年	月	IGFA（世界記録）	JGFA（日本記録）
2011	1	オールタックル・レングスレコードスタート	
	1	フライフィッシングのリールから事前に引出しておけるフライラインの長さを36.57m（120フィート）以内に規定	
	2	アシストフックのルール新設	
2012	1		JGFAレングスレコード・スタート
	1		メーターオーバークラブスタート
	2	リリースに関するルールと推奨事項を発表	
	4	フライフィッシングのリーダー提出条件変更	
2013	1	同一人物、同一日、同一魚種を複数釣った場合、申請できるのは最も重い、あるいは最も長いもの1尾のみとされた	
2014	3	セーフティーラインに関するルール変更	
	4	淡水&フライフィッシング・カテゴリーに女性部門新設	
2015	1	オールタックルの最低申請重量は、最大重量と思われるものの1/2以上でなくてはならない（目安ではなくなった）	
	1	IGFA・トロフィークラブ新設	
2016	7		コクチバスなどを外来魚法に基づきオールタックル部門で申請受付開始
2017	4	IGFAルール改正4点 ・アングラー以外の人の干渉　・バッキングとメインラインの規定変更 ・世界記録ラインクラス対象魚の削減 ・ラインクラス部門の申請最低重量の変更 （10kgラインクラス以下はライン強度の1/2以上、15kgラインクラス以上はライン強度と同等以上）	
	4		日本記録での最低申請重量は従来通り、「1ポンド(453g)以上」と発表
	4		日本記録の審査は世界記録とは独立して審査することを発表
	5	オールタックル部門でも、ダブルライン、リーダーの長さは、使用ラインクラスの規定に従うことと発表	
2019	5	ラインクラス部門の申請最低重量の再変更（すべてのラインクラスにおいてライン強度の1/2以上）	
2019	7		300kgクラブ新設
2020	4		タイリクスズキ、オールタックル部門で申請受付開始
	5	フライのドロッパー仕掛けに関するルールを改正	